

資本論 第一巻 資本の生産過程

第七編 資本の蓄積過程

第二十二章 剰余価値の資本への転化

第1節 拡大された規模における資本主義的生産過程。

商品生産の所有法則の資本主義的領有法則への転換

■的場昭弘著 超訳『資本論』

第二十二章 剰余価値の資本への転化

第1節 拡大された規模での資本主義生産過程。商品生産の所有法則の資本主義的領有法則への転換

・冒頭の文章は、この章の中身をすばりとのべている。

「これまで、剰余価値が資本からいかに生まれるかを考察しなけりばならなかつたのだが、今度は剰余価値から資本がいかに生まれるかを考察しなけりばならない。」

「剰余価値の資本としての利用、剰余価値の資本への再投資、すなわち資本の蓄積である。」

・すばり拡大再生産を取り扱うというわけだ。

・労働者が生み出した剰余価値を消費することなく、それを新たな生産手段と労働力に投資すると考える。

「最初の一萬ポンド資本は二〇〇〇ポンドの剰余価値を産み、資本化される。二〇〇〇ポンドの新しい資本は四〇〇ポンドの剰余価値を産み、それは再度資本化され、したがって追加資本に利用され、新しい剰余価値八〇ポンドが産み出される。」

・この過程は、最初の一萬ポンドがどこから来たかを問はず、それ以降の追加資本は当然労働者の搾取から生まれていることを意味している。

・搾取をとおして、資本が拡大再生産されていくことこそ、資本主義の拡大再生産であることがわかる。

・所有の法則が個人の労働に基づく所有から、他人の労働を支配する領有法則に変化している。

・こうして領有法則は、資本家にとって他人の不払い労働を自分のものにする権利、他方で、労働者にとって自分のつくり出した生産物を放棄する権利として出現するのである。

■あらすじとイラストでわかる資本論 文庫ぎんが堂

『生産物は資本家に属し、労働者には属さない』

第二十二章 剰余価値の資本への転化

——資本の増殖が本格化したきっかけは何？

*資本の回転によって得られた剰余価値を、新たに資本に組み込むことを「資本の蓄積」という。蓄積された資本による新たな回転は、より多くの剰余価値を生む。さらに多くの剰余価値を蓄積し、多くなった資本で回転させるとさらなる剰余価値を生み出す。このように資本が拡大していくことが「拡大再生産」だ。

*この拡大再生産が、本当の意味での資本なのだ。剰余価値が資本の一部になることが、本当の意味での資本なのだ。単純生産はいわば剰余価値が生まれるしくみを説明するだけだ。その同じところをグルグル回る軌道は、拡大再生産になって、らせん状に軌道が大きくなりつつ上昇していく。

*初めの前貸しされたお金を別にすれば、追加された剰余価値は他人の不払労働から得られたものだ。資本が回転すればするほど、前貸しされる資本に占めるその割合が増えていく。そのうち剰余価値がすべてを占める資本が、新たな剰余価値を生む。

*そうして資本家は他人の不払労働を得る立場、労働者は自分自身の生産物を得られなくなる立場が固まっていく。生産物はずねに資本家のもので、労働者は奪われる。前貸した資本じたいが労働者の不払労働の成果であり、資本家は何もしていないのに、である。これも元をたどれば、労働力という商品を作るものがない労働者が歴史に登場したことで起こったことだ。

——拡大再生産はどんどん資本を増やしていく！

「剰余価値が剰余価値を生む」

*前の第 21 章では、「 $G \rightarrow W \rightarrow Gx$ 」の式のうち、剰余価値 x の部分を資本家が消費してしまう「単純再生産」を挙げた。この章ではそれに対して「拡大再生産」を取り上げている。拡大再生産とは剰余価値を追加投資することで、さらなる利益をあげようというものだ。ここでマルクスは「アブラハムがイサクを産み、イサクがヤコブを生み……」という『旧約聖書』の話を用いている。生み出したものが、また別のものを生み出すというわけである。

*前の第 21 章と同じように、まず資本家が 1000 万円を投資して、労働者たちに商品をつくらせたとする。それを売ることで、1200 万円になった。1000 万円はまた投資して次の商品を再生産するとして、残りは 200 万円。これが剰余価値 x だ。半分の 100 万円を資本家が自由に使ったとしても、100 万円をさらに 1000 万円に上乗せして投資する。つまり今度の初期投資額は 1100 万円になる。するとその 100 万円分の投資が、今度は 20 万円の剰余価値を生み出す。そこからさらに次の再生産に追加投資して……。資本は円の軌道から、らせん軌道になっていくとマルクスはいう。

■面白いほどよくわかるマルクスの資本論

土肥誠監修

第二十二章 剰余価値の資本への転化

『追加資本はすべて資本家の合法的所有物』

*第 1 節は「拡大された規模における資本主義的生産過程。商品生産の所有法則の資本主義的領有法則への転換」と題され、ずばり「拡大再生産」を取り上げている。

*冒頭で「(第 21 章では剰余価値が資本から生まれることを考察したが) いまやわれわれは、いかにして剰余価値から資本が生ずるかを考察せねばならない。資本としての剰余価値の充用、または資本への再転化を資本の蓄積という」と宣言している。

*経済学的な意味での蓄積とは、剰余価値の一部分のみを個人的消費に使い、残りを資本に転化して拡大再生産をはかることを意味する。単純再生産では、資本家によってすべてが消費されていた剰余価値を、あらたな生産手段として労働力に投資する。例えば、最初に投資される総額 1 万ポンドの資本(資本家が用意したとする)は、可変資本として前貸しされる 20%は、剰余価値率が 100%と想定されているので、2000 ポンドの剰余価値を生み出す。この 2000 ポンドを追加投資すれば、このうちの 20%が労賃として前貸しされることになり、400 ポンドの剰余価値を生み出す。さらにこの 400 ポンドが、追加資本として前貸しされれば、80 ポンドの新たな剰余価値を生み出す、というように、追加資本はすべて労働者の搾取から生まれる。これらはすべて資本家の合法的所有物となる。これが資本主義における拡大再生産の実態である。

資本としての剰余価値の充用、または剰余価値の資本への再転化を資本の蓄積という

●剰余価値の資本への転化の流れ

資本家が用意したとする総額 1 万ポンドの資本



可変資本として前貸しされる 20%は剰余価値率が 100%と想定されているので、2000 ポンドの剰余価値を生み出す。



この 2000 ポンドを追加投資する。



このうちの 20%が労賃として前貸しされることになり、
400 ポンドの剰余価値を生み出す。

▽

さらにこの 400 ポンドが、追加資本として前貸しされれば、
80 ポンドの新たな剰余価値を生み出す。

▽

追加資本はすべて労働者からの搾取だが、
資本家の合法的所有物となる。

■労働大学刊 「資本論 解説」より 剰余価値の資本への転化 拡大再生産

- ・新しく生み出された剰余価値が、どのようにしてもとの資本に追加されるのか。
- ・新しく生み出された剰余価値が、再び資本として用いられること、もとの資本に追加されることを、資本の蓄積とよぶ。
- ・1000 万円の資本。紡績業。その資本の 800 万円を綿花や機械等の不変資本（生産手段）に、200 万円を賃金すなわち可変資本（労働力に投下された資本）に投下しているものとする。
- ・剰余価値率は 100%と前提しよう。
- ・こうしてこの資本家は、毎年 500 キロの糸を生産し、それを販売して 1200 万円の貨幣を手に入れるとしよう。
- ・剰余価値を 100%と前提としているので、この 1200 万円のうち 200 万円が剰余価値である。
- ・彼は、この 200 万円を再び資本に追加する。
- ・不変資本と可変資本の割合を、ここでも 4 対 1 とすれば、この資本家は新しくつけ加わった 200 万円のうち、160 万円を綿花等の購入に、40 万円を紡績労働力の購入にあてる。
- ・いままで 1000 万円であった資本は、こんどは 1200 万円（960 万円の不変資本と 240 万円の可変資本）にふえ、拡大された規模で生産が続けられる。
- ・追加された 200 万円の資本が、さらにまた 40 万円の剰余価値を生むのである。

- ・前貸しされた資本は、初めは貨幣の形で存在していた。
- ・これとは反対に、剰余価値は、生産された商品全体の一部として存在している。
- ・しかし、総生産物が売られて貨幣にかえられるや、前貸しされた資本と剰余価値との区別はなくなってしまう。
- ・両方が一緒になって一定額の貨幣、先の例でいえば 1200 万円の貨幣なのである。
- ・資本家はその 1200 万円で、一方では綿花等の不変資本を、他方では可変資本としての労働力を買う。
- ・そのことによって初めて、拡大された規模で生産を開始することができるのである。
- ・そのためには、この貨幣で買うところの綿花や労働力等の商品が、市場に見出されないといけない。
- ・市場に見出されるということは、その前に、綿花等の生産手段と、労働者が生活のかてとする生活手段が、必要な分量だけ、社会の年間の総生産物の中に含まれていないといけないことは、いうまでもない。
- ・1 年間の総生産物は、まず第一に、その間に消費された生産手段と生活手段を補わなければならない。
- ・それを差し引いて後に残るものが、剰余価値を含んでいる剰余生産物である。
- ・この剰余生産物が全部、資本家階級の欲望をみたすために消費されてしまうならば、資本の蓄積は、行われず、ただ単純再生産が行なわれるにすぎない。
- ・資本を蓄積するためには、剰余生産物——その価値が剰余価値である——の一部を追加的な資本として用いなければならない。
- ・資本というのは、労働過程で使用される生産手段と、労働者が生活してゆくための、労働力を再生産するための生活手段にほかならない。

- ・そこで、新しく資本を追加して生産を拡大するためには、資本家階級は、一定量の労働を追加しなければならない。
 - ・もちろん労働の追加は、すでにいままで使用していた労働者の搾取を、労働強化や労働時間の延長等で強めることによってできる。
 - ・しかしそうでないばあいには、労働力を新しく追加しなければならない。
 - ・この追加労働力も、資本主義的な生産の機構が用意してくれる。
 - ・資本主義社会は、自分の労働力を商品として売り、その賃金によるほかには生活のすべを何一つもたない労働者階級を作り出し、再生産している。
 - ・通常の賃金は、労働者個人の生活だけでなく、磨滅（まめつ）し、老化し、死亡してゆく労働力の補充人員の生活手段をも購入するのに足るものである。
 - ・資本家階級は、労働者階級によって供給されるこの追加労働力を、追加生産手段と結合させればよい。
 - ・そうすることによって、剰余価値の資本への転化、すなわち資本の蓄積は完了するのである。
- ・ここで先の例にかえろう。初めの 1000 万円の資本は、200 万円の剰余価値を生んだ。
 - ・いま資本家によって消費される剰余価値を考えに入れないと、この 200 万円は、資本として追加され、さらに 40 万円の剰余価値を生む。
 - ・同じようにしてこの 40 万円が資本として追加され、8 万円の剰余価値を生み、さらにこの 8 万円が 1 万 6000 円の剰余価値を生んでゆく。
 - ・新しく追加された資本とならんで、もとの資本（最初は 200 万円の剰余価値にたいする 1000 万円）も、繰返し繰返し自分（1000 万円）を再生産し、剰余価値（200 万円）を生産し続ける。
 - ・そしてすべての蓄積された資本についても、同じことがいえる。このことを忘れてはならない。
- ・ところで、初めに 1000 万円の資本が前貸しされた。資本家はその 1000 万円をどこから手に入れたのか？
 - ・マルクス以前の経済学者たちは、「それは資本家自身の労働と彼の先祖の労働によって」ともっともらしく答えている。しかし、これはウソである。これについては、第二四章「いわゆる本源的蓄積」で明らかにする。
 - ・新しく追加された 200 万円の資本については、それが生まれてくる秘密を、われわれは正しくまなんだ。
 - ・それは剰余価値が資本に追加されたものであった。これは、全く搾取によって手に入れた他人の不払い労働からなっている価値である、ということはいうまでもない。
 - ・資本を追加して生産を拡大する際、すでに使用している労働者の搾取度を一定とすれば、資本家はこの追加資本の一部で、新しく労働者を雇い入れる。
 - ・この追加労働力が合体されるところの生産手段も、追加労働力の生産手段も、いっさいが資本家階級によって労働者階級からもぎとられた貢物（みつぎもの）にほかならない。
 - ・資本家階級は、労働者階級からもぎとったもの（剰余価値）の一部で新しい労働力を追加する。このことは、ちょうど征服者が、掠奪した貨幣で征服された者から商品を買うのと全く同じやり方である。
- ・追加された資本——それは労働者が生み出したものだった。
 - ・それがこんどは生産した労働者自身を使用する。
 - ・このばあいに、追加資本（200 万円）の生産者である労働者は、まず、もとの資本（1000 万円）の価値をふやすことを続けなければならない。
 - ・その上に、自分たちが生み出した剰余価値が、あらたに資本として追加されると、さらに多くの労働を追加しなければならない。
 - ・こうして労働者階級は、今年の剰余労働によって、来年、あらたに追加的な労働を使用するところの資本を作り出したのである。このことが、「資本によって資本を生み出す」といわれることなのである。
- ・第一番目に追加された 200 万円の資本蓄積を生んだ前提は、資本家によって前貸しされた

1000 万円の価値額であった。

・しかし、第二番目に追加された資本 40 万円の前提は、先に行われた、第一番目の剰余価値 200 万円が資本に追加されたことにほかならない。

・このようなことが繰返されて、いまや、資本家による過去の搾取分＝不払労働の掠奪（りゃくだつ）が、たえずその規模を大きくしながら、次々と不払労働を一人占めにするための、唯一の条件として現われる。

・剰余価値の資本への充用＝資本蓄積が多ければ多いほど、この資本はますます多く蓄積することができるのである。

・第一番目に資本に追加された剰余価値も、第二番目以下のそれも、資本の一部で労働力（可変資本）を買い入れたことによって生み出された。

・商品交換の法則は、等しい価値をもったものが、互いに、価値通りに交換されるということである。

・ところで労働者は、労働力という商品を資本家に売って、その価値通りの賃金を受取るものとする。

・資本家はつねに労働力を買い、労働者はつねに労働力を売る。

・それが現実の価値通りに売買されるものとするれば、商品交換の法則にのっとっているわけだ。

・それなのに、資本の蓄積によって、ただで手に入れた不払労働＝剰余価値で、ほかの価値物（商品）を買い入れることができる。

・ここにいたって、等しい価値通りの交換という商品交換の法則は、何の等価も支払うことなく手に入れた剰余価値で、ほかの商品を手に入れることができるという、全く正反対の法則に変わってしまう。

・すなわち、資本主義的取得の法則とよばれるものへ変わってしまうのである。

・こうなると、商品交換の法則にもとづいているとはいっても、資本家と労働者との間の交換関係は、単に流過程に属するみせかけだけにすぎなくなる。

・その真の資本主義的な内容は、資本家がたえずただで手に入れる剰余価値の一部分を、繰返しより多くの労働と交換することによって、さらに剰余価値を追い求めてゆくことである。

・もともと、商品生産における所有権は、自分の労働によって生産した商品にたいしてだけ、主張することができるものであった。

・そして商品交換に際しては、こうして同じ権利をもっている商品所有者だけが相対する。

・ところがいまや資本主義的所有というのは、労働者にとっては、自分自身が額に汗して生産した商品を取得することができない。

・他方資本家の側では、他人（労働者）の労働の生産物を取得する権利、そういうものとして現われる。

・このようにして、資本主義的な取得のやり方は、ちょっと見ると、本来の商品生産の法則を無視しているように見える。

・でも、これは、商品生産本来の所有の法則を侵害するために生ずるのではなく、むしろその法則を適用することによって生ずるのだ、ということがたいせつなことである。

・もともと、一定の価値額が、最初資本になるのは、全く交換の法則にしたがっていた。

・いま生産手段を別にして労働力についていえば、労働者はお互いに独立した商品所有者として彼の労働力を売り、資本家がそれを買ったのである。

・労働者は労働力の価値を受取り、その使用価値（労働）を資本家にゆずった。

・どのような売買についてもそうであるように。

・生産物の価値に含まれているものは、一つは消費された生産手段の価値であり、二つは労働力の価値に相当する部分（賃金）であり、三つは剰余価値であった。

・労働力の価値すなわち賃金に相当する額をこえて、剰余価値が含まれているということは、決して労働力の売り手をごまかすことにもとづいているのではない。

・それは買い手である資本家が、労働力という商品を消費することだけにもとづいている。

・「労働力という特殊の商品」とよばれるのは、このように労働がその使用価値＝労働を提供し、この労働が価値を創造するという点にあったことを思い出せばよい。

・このように、初め貨幣が資本に転化するのには、商品生産の経済法則、あるいは交換の法則、およびそれにもとづく所有権を少しも侵害するものではない。

- ・それどころか、それに一致して行われる。
- ・しかし、それにもかかわらず、貨幣が資本に転化した結果、次のようなことが生じる。
- ・一つは、生産物は資本家に属して、労働者には属さない、ということ。
- ・二つは、この生産物の価値は、前貸しされた資本の価値のほかに、剰余価値を含んでいる。この剰余価値は、労働者にとっては労働を必要としたのに、資本家にとっては何も要しなかった。しかもそれにもかかわらず、資本家の合法的な所有物となる、ということ。
- ・三つは、労働者はその労働力を保有していて、買い手が見つければ、あらためてそれを売ることができる、ということ。
- ・以上、三つの結果を伴う。そして、このような貨幣の資本への転化が、たえず新しく繰返される。そのことは、単純再生産であろうと、拡大された規模での再生産であろうと変わりはない。
- ・単純再生産においては、資本家は剰余価値の全部を浪費してしまう。それにたいして拡大された規模での再生産においては、剰余価値の一部だけを浪費して、残りを資本として充用する、すなわち蓄積をするというだけのことである。
- ・今日機能している資本のもとでも、それぞれの交換の法則にもとづいているかぎり、商品生産における所有権には少しもふれることなく、商品生産の所有法則は、資本主義的取得の法則に変化するのである。
- ・いや、それどころではない。資本主義的商品生産が社会のすみずみまでおおい、すべての生産物が初めから販売するために生産されるようになったのは、賃金労働にもとづいていた。
- ・いいかえれば、労働力が、独立した労働者自身によって商品として自由に売られるようになるその時から初めて、商品生産が支配的になったことに注意しなければならない。まさに「賃金労働がその基礎となるときはじめて、商品生産は自己を全社会に強制する」のである。
- ・そこで、商品生産が、その諸法則にしたがって資本主義的商品生産に発展してゆくにつれて、商品生産の所有法則が、資本主義的な取得の法則に変わってゆくのである。